

新型コロナウイルス感染症 5類移行後の学校の取り組みについての 調査レポート

2023/09/06

1. 調査概要

2. アンケート結果

調査結果概要

1) 健康観察に関する業務の変化

2) 児童生徒の検温結果の集約方法の変化

3) 校務支援システムへの入力事項の変化

4) 健康観察業務の課題感

3. まとめ

1. 調査概要

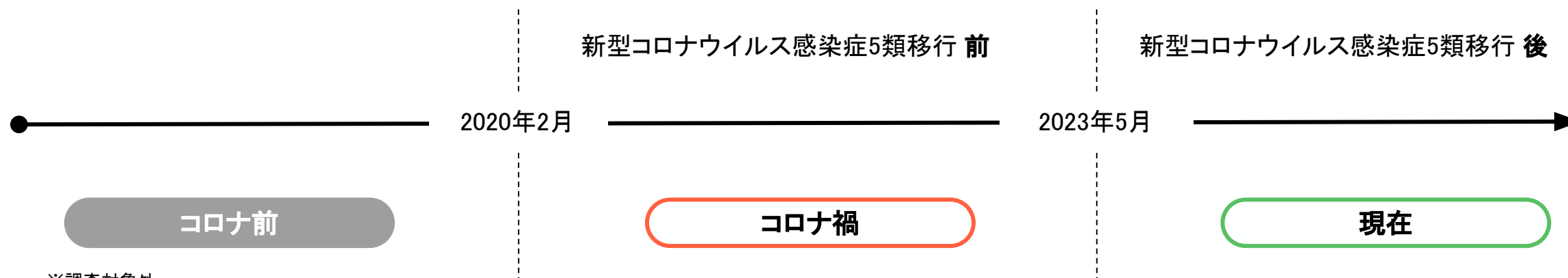
1. 調査概要

新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことで、学校現場の健康観察に関する業務がどのように変化したのかtetoruを利用する教職員の方々を対象に以下アンケートを実施しました。

アンケート名	「新型コロナウイルス感染症5類移行後の学校の取り組みについてのアンケート」
調査時期	2023年06月21日(水)～2023年07月07日(金)
調査方法	Google Formによるアンケート調査
回答数	495人 (管理職:356人、教諭:85人、養護教諭:24人、教育委員会:20人、その他:10人)
調査主体	Classi株式会社

1. 注意事項

- この調査は、新型コロナウイルス感染症5類移行前(2020年2月～2023年4月)と移行後(2023年5月以降)の児童生徒の健康観察に関する学校の取り組みがどのように変化したのかをまとめています。
- そのため、2023年5月を基点に新型コロナウイルス感染症5類移行前を「コロナ禍」、移行後を「現在」としてレポートをまとめています。
- 新型コロナウイルス感染症流行前から行っていた健康観察業務(児童生徒の体調チェックや健康観察簿への記入)、プールや宿泊学習の際の検温は調査には含みません。ただし、「4)健康観察業務の課題感」のみ、新型コロナウイルス感染症流行前から行っていた健康観察業務の内容については調査しています。



※調査対象外
ただし「4)健康観察業務の課題感」のみ聞き取り

2. アンケート結果

2. 調査結果概要

1) 健康観察業務の変化

- コロナ禍と現在を比較すると93.7%が「変化した」と回答
- コロナ禍では「児童生徒の検温記録確認」が最も多かったが、現在は「行っていない」が最も多い

2) 検温結果の集約方法

- コロナ禍も現在も集約方法は「紙」が主流
- 現在は検温結果の集約を「行っていない」が最も多い

3) 校務支援システムへの入力

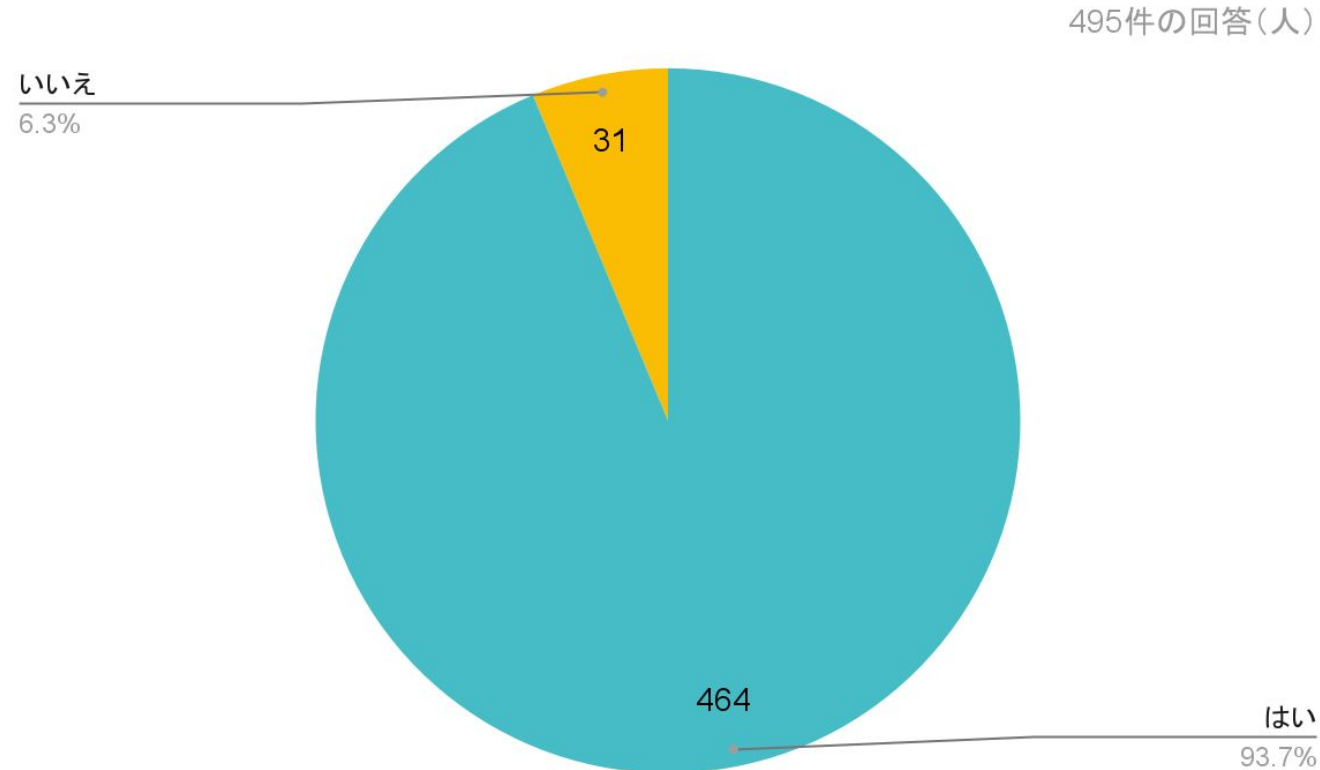
- コロナ禍も現在も「入力していない」が最も多い
- 入力する場合の主な内容は「児童生徒の健康状態(症状)」

4) 健康観察業務の課題感 ※新型コロナウイルス感染症流行前から行っていた健康観察業務の内容についての結果

- 健康観察に関する業務に課題を感じていない人が多い
- 課題としては「児童生徒の健康状態の把握が難しい」「申告と実態にズレがある」などが挙げられた

1) 健康観察に関する業務の変化

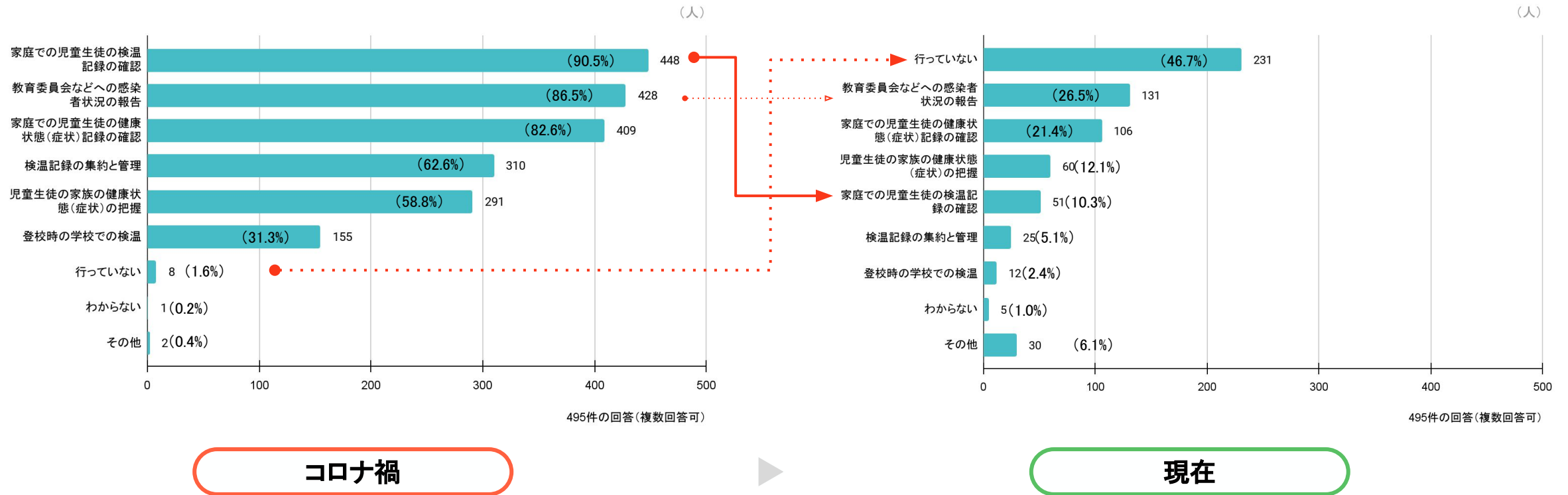
Q. 新型コロナウイルス感染症が5類に移行してから健康観察(検温等)の対応に変化はありましたか



- 93.7%が変化があったと回答。多くの学校で、健康観察業務はコロナ禍から変化があったことがわかる。

1) 健康観察に関する業務の変化

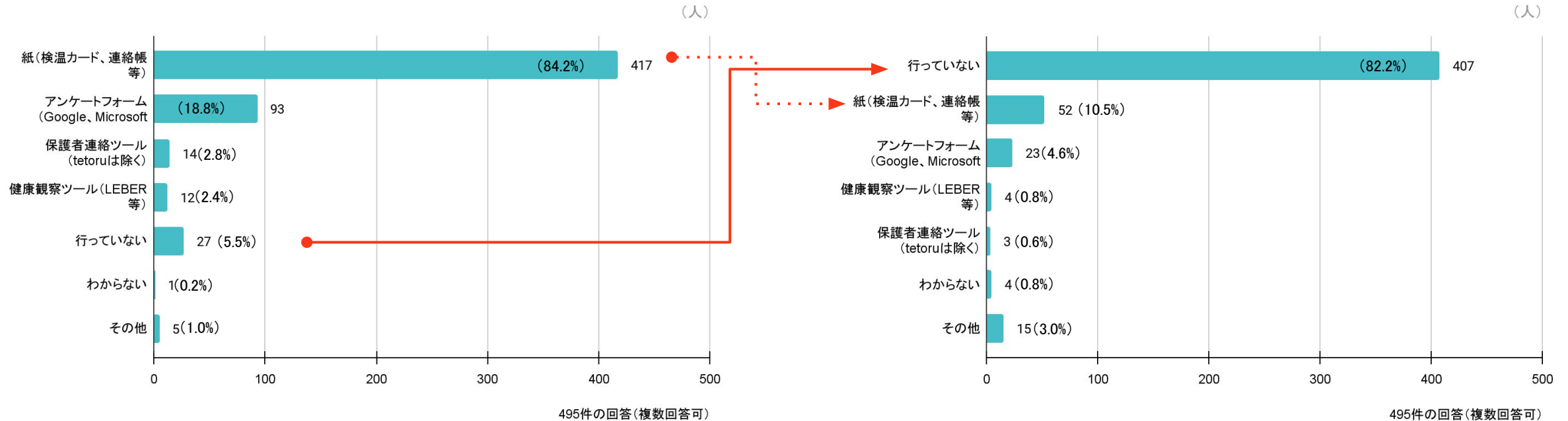
Q. 健康観察に関する業務で学校では何を行っていましたか



- コロナ禍は「家庭での児童生徒の検温記録の確認」が最も多く90.5%だったが、現在は10.3%まで減少。
- 現在は「行っていない」が最も多く46.7%。
- 教育委員会への報告など現在も引き続き行われている業務はあるものの、大きく変化している。

2) 児童生徒の検温結果の集約方法の変化

Q. 児童生徒の毎日の検温結果などは、保護者からどのような形で提出してもらっていましたか



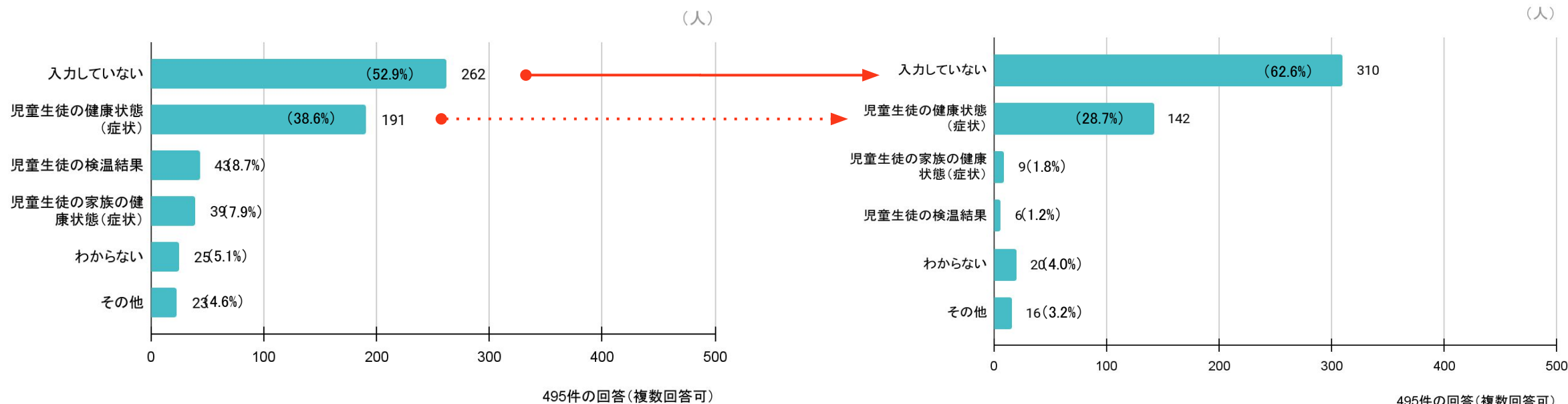
コロナ禍

現在

- 現在は「行っていない」が最も多く82.2%。
- コロナ禍は「紙」が最も多く84.2%、現在は10.5%まで減少した。
- 集約する学校は少なくなっているものの集約する場合は現在も「紙」で行われることが多く、変化は見られない。

3) 校務支援システムへの入力事項の変化

Q. 校務支援システム等へ何を入力していましたか



コロナ禍

現在

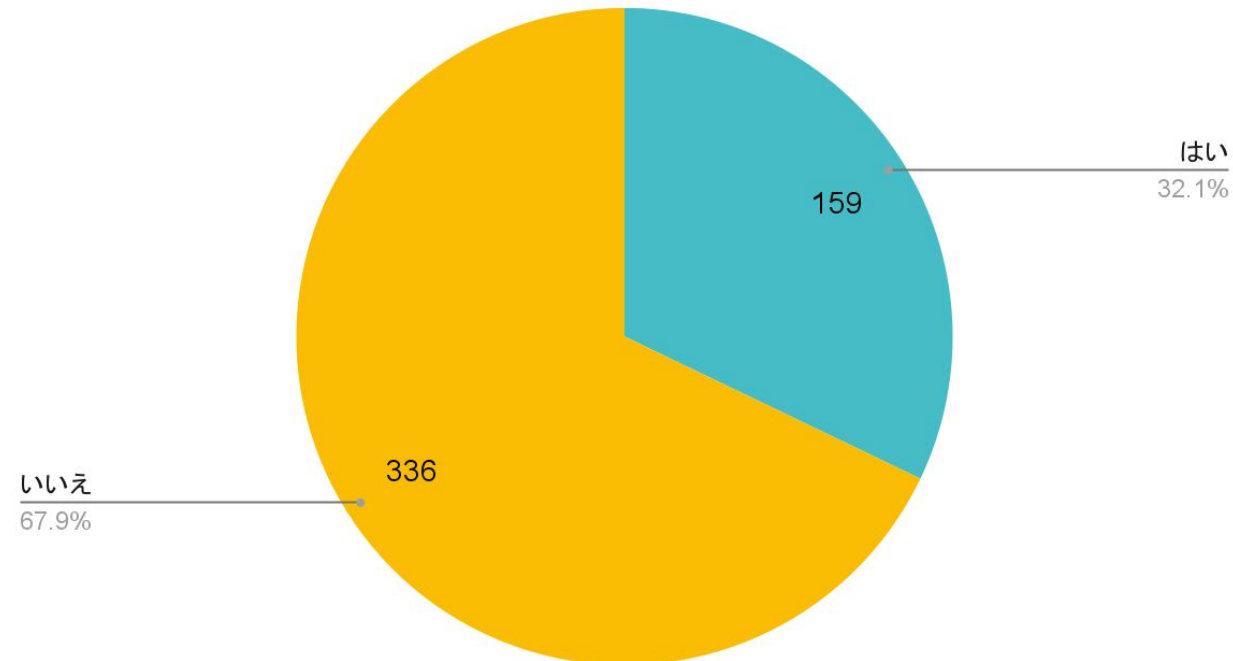
- コロナ禍も現在も「入力していない」が最も多く、コロナ禍52.9%から現在は62.6%に増加。
- 入力している内容としてはコロナ禍も現在も「児童生徒の健康状態(症状)」が多く、現在では28.7%に減少。
- コロナ禍以前も「入力していない」が多いため大きな変化は見られないが、入力する内容は全体的に減少している。

4) 健康観察業務の課題感

新型コロナウイルス感染症流行前から行っている通常時の健康観察に関わる業務についての課題感について

Q. 健康観察に関わる業務で課題に感じていることはありますか

495件の回答(人)



- コロナ禍以前から行っている健康観察に関する業務に関しては課題を感じていない人の方が多い。
- 「はい」と回答した方の健康観察業務における課題感としては「児童生徒の健康状態の把握が難しい」「申告と実態にズレがある」「教職員間の情報共有が難しい」などが挙げられた。(次ページ以降詳細)

4) 健康観察業務の課題感 課題に対するコメントの抜粋

児童生徒の健康状態の把握が難しい

- 健康観察だけでは正確に現状を把握できていない。
- 5類へ移行してからは学級での健康観察のみで全体像が分かりにくい。
- 家庭で家族が感染していても、把握できない。他

申告と実態にズレがある

- 家庭からの連絡が、正確かどうか判別できない。
- 家庭での健康観察や検温がきちんと行われなくなっている。
- 検温や健康状態を保護者が記入するが、記録では熱がなくても登校してから発熱があるケースが多々見られた。他

教職員間の情報共有が難しい

- 学級での健康観察の結果を、職員室や保健室へ報告に行かなければならないこと。
- 大規模校のため、出欠連絡の行き違いや正確な記録づくりが難しい。
- 朝の時点での児童の健康状態の把握を全職員での共有が難しい。他

4) 健康観察業務の課題感 課題に対するコメントの抜粋

その他

- 担任が紙媒体で記録した記録を管理職が集約することが困難である。
- 登校した生徒の健康観察結果の集計は手作業で行っているため、手間と時間がかかること。
- 健康観察は大切なことだが、紙での記入、回収は煩雑になり保護者、生徒、教職員の負担となる。
- 紙媒体で行っているので、再度記録として入力しなおさなければならない。
- 健康観察板で健康観察を行っており、校務支援システムへ転記が必要である。
- テトルで保護者から入力された内容を、校務システムに手入力しています。連動すると負担が減ります。
- 検温カードの確認や検温していない児童に対しての対応など、朝の業務が煩瑣になることが多々あった。
- 登校前、登校後、そして授業中に体調の変化が大きい児童生徒の対応が難しい。
- 保護者からの連絡忘れ等で、欠席・遅刻児童の把握ができず、担任等が個別に電話連絡をしなければいけない。
- コロナへの対応に関する基準がなくなったため、取り扱いが難しくなった。 他

3. まとめ

コロナ禍で行っていた多数の健康観察業務は減少傾向にある

- 新型コロナウイルス感染症が5類に移行してから健康観察(検温等)の対応に、多くの学校で変化が見られた。
- コロナ禍では90.5%の回答者の学校で行われていた「家庭での児童生徒の検温記録の確認」も10.3%にまで減少した。

継続観察の場合は紙での集約が主流、校務支援システムへの入力内容に大きな変化なし

- 現在では児童生徒の検温結果の集約を行っていない学校が多いが、集約する場合は依然として「紙」で行われている。
- 校務支援システムへの入力内容に関しては、コロナ禍からの変化はあまり見られず「入力していない」が多かったが、「児童生徒の健康状態(症状)」など引き続き入力されている項目もある。
- 紙での集約や集計、校務支援システムなどへの入力の手間を課題としてあげている声もあり、デジタル化による業務改善が期待される。

児童生徒の正確な健康状態の把握や教職員間での情報共有に課題感あり

- 現在行われている健康観察業務に関して「課題を感じていない」と回答する方が多い一方で、「課題を感じる」と回答する方からは児童生徒の正確な健康状態の把握や教職員間での情報共有の難しさなどについて課題が挙げられた。

アンケート調査へのご協力、ありがとうございました。